【講演概要】

1．『自己無力感』をバネに、学校の探求学習から世界へ。

当初やらされていると感じていた学校の探究学習を通じて社会や世界に出会い SDGs や社会課題を自分ごととして捉えるように。その後、高校生でも何か行動を起こせないかと考え、自治体や地域企業などを巻き込み多世代で行動を起こし 1000 人以上に課題提起をすることができた。

この経験を元に、学生は地域や社会の起爆剤となることができ、その世代間交流から行動を起こすことで地域や社会が変わるという一例をお伝えします。

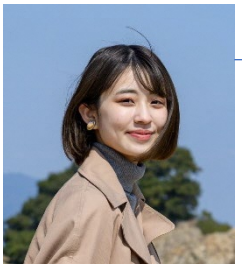
須藤あまね　聖心女子大学 4 年/地方創生 SDGs ユースアンバサダー

2000 年北海道生まれ。高校時代「共生」をテーマに SDGs の勉強を始める。高校 1・2 年次に NY の国連本部やタイ王国での研修を経て、3 年次に地元で普及啓発活動を行う。現在、持続可能な社会を目指し「答えのない問題」を学ぶ一方、カルティブでは学びを活かし地域課題解決を考えている。

2．『井の中の蛙』の自覚と、その視点を活かした進路選択や活動

高校時代、一学年 20 人という井戸の中から、自分の力量を知るために海に出ようと決意。海では多様な人々との出会いがあった。そこで見つけたのは、「他者よりも優れている」という競争的な特徴ではなく、自己を構成する要素(家庭環境や学校環境、それにより醸成された感性など)の独自性だった。この気づきは、自分の思考や社会の見え方に自信を持って行動するきっかけとなる。

コンプレックスを独自性へと変容させた経験から、柔軟に自己を変容させながら、自己主導的に生きていく術について考えます。



野月そよか　東京学芸大学 3 年/ナラティヴ・エデュケーター

2001 年北海道生まれ。高校時代、地方と首都圏における進路選択の格差を目の当たりにしたことときっかけに、「当事者意識を持った子どもたちと、自らの人生を物語る大人たちの交流」の重要性を感じる。現在、多世代交流について学びを深めながら「当事者意識」と「省察」をテーマにグラフィックレコーディングを手掛けている。